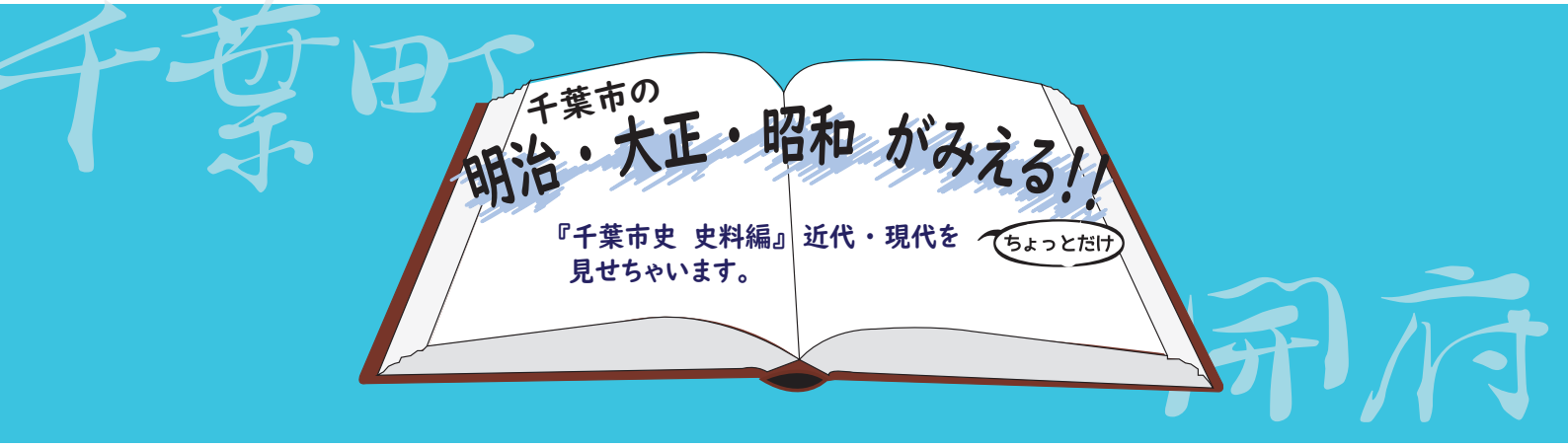
https://www.city.chiba.jp/kyodo/

# ちば市史編さん便り

Chiba-shishi News Letter NO.35 2025.9

千葉市の明治・大正・昭和がみえる !!
第 15 回　千葉開府八百年から 900 年へ
～時代をうつしだした記念事業～……1 - 3
出張 !! 紙上☆古文書講座
第 3 回　下から返る文字①……4



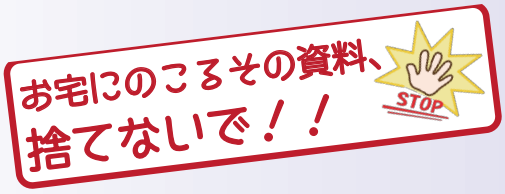

連載中の「千葉市の明治・大正・昭和がみえる !!」第 15 回は、千葉市史編集委員の松浦眞二先生の「千葉開府八百年から 900 年へ～時代をうつしだした記念事業～」です（2 ～ 3 頁）。

この頁の右上にあるロゴマークにも「900」の文字がみえますとおり、千葉市では現在、2026 年にむかえる「千葉開府 900 年」関連の各種記念事業が開催されています。このロゴマークの入った幟や、さまざまなポスターなどを見かけた方もいらっしゃるかもしれません。

この記念事業は、およそ 100 年前、大正 15 年（1926）に開催された「千葉開府八百年祭」に端を発します。今回、先生には『千葉市史　史料編　近代 2』に掲載しました「千葉開府八百年祭」に関わる史料をもとに、当時のようすや、その後の八百十年祭、八百五十年祭への流れを解説いただきました。

「千葉市」の誕生以来、その発展とともにあった「開府」を記念する事業。もう 100 年後の「1000 年」まで続くことを願います。

現在の千葉市域の明治末期から大正・昭和戦前・戦期のようすを具体的に示す史料 426 点を収録した『千葉市史　史料編　近代 2』は、千葉市立郷土博物館で購入できます。B5判、3,000 円（税込）。




古い書付や写真、民具類など、台風などの自然災害やそのほかの事情により濡れてしまったり、汚れてしまった資料がありましたら、その対応のお手伝いができればと思います。

これらを捨ててしまう前に、可能であれば、**市史編さん担当（連絡先は 4 頁参照）**までご一報ください。お宅に残る歴史や思い出を、少しでもよい形で後世に残していけるよう、できる限りのお手伝いをさせていただきます。

# 第 15 回　千葉開府八百年から９００年へ～時代をうつしだした記念事業～

千葉市史編集委員　松浦　眞二

『千葉市史 史料編 11 近代２』では、大正 15 年（1926）の千葉開府八百年祭を取り上げました。大正 10 年に市制が施行された千葉市では、京成電気軌道の千葉乗り入れや軍施設の増加、インフラの整備などで都市化が進み始めていました。しかし同時に、第一次世界大戦の好景気の反動や関東大震災によって不況がつづく時期でもありました。前記史料集掲載の新聞記事には「不景気凄じく」（大正９年 12 月）、「吹き捲る不景気風」（大正 13 年 12 月）、「街頭の不景気益深刻」（昭和４年 11 月）などの見出しがあふれています。

市長から記念祭の実施が突如提案されたのは、八百年にあたる大正 15 年１月の千葉市会協議会でした。当初の構想は、市の財源が乏しいので極めて質素に教育品展覧会または千葉神社での記念式典を夏か秋に実施する、というものでした。ところが協賛会が組織されると、総予算２万円の大部分を市内各区から 12,008 円 50 銭、有志から 5,450 円の寄附金でまかなうことができ、短期間にもかかわらず準備は急ピッチで進みました。

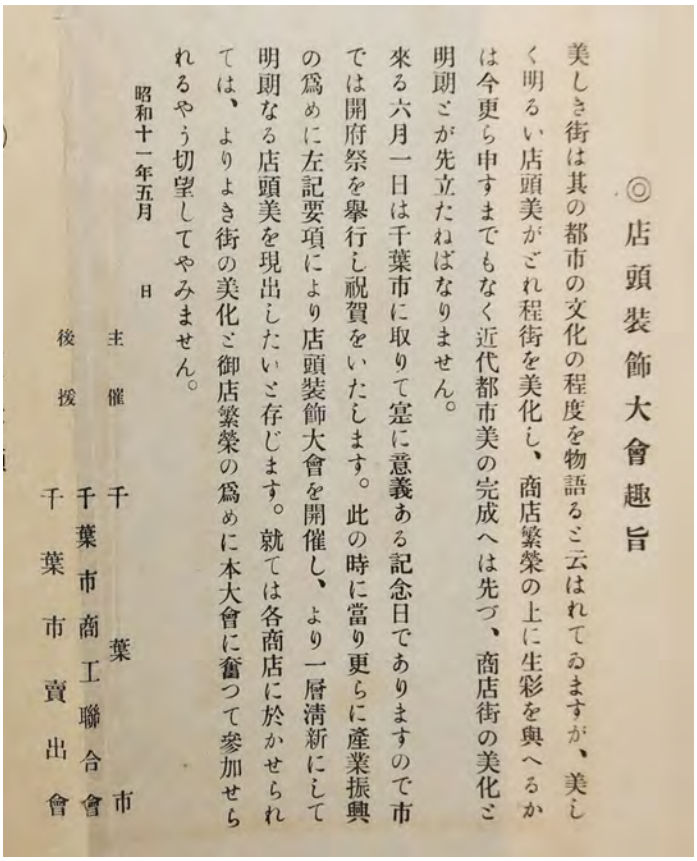
６月１日から５日にかけて天気にも恵まれ、煙火競技大会、自治資料展覧会、教育者美術展覧会並びに児童成績品展覧会、衛生展覧会、災害防止展覧会、度量衡展覧会、改良農具展覧会、活動写真、千葉県聯合青年団体会、武道大会、小学校長会並びに教育会総会、帰性会免囚保護デー、米穀肥料商同業組合総会のほか、市民による提灯行列、児童による旗行列、角力大会、各区主催の余興と多彩な行事が繰り広げられました。

その様子は、「打続ける爆竹に今日の盛典を見んものとわらぢ掛けの年寄り連が近郷近在から押し掛け、市民は殆ど其生業を休み老若男女おしなべて華やかに正装の市街を埋め、神前祭の式場千葉神社境内は文字通りの寿司詰、雑踏から起る悲喜劇が至る所で演出される」（『千葉毎日新聞』大正 15 年６月２日）と報じられました。不景気にもかかわらず、開府八百年記念を契機として市の発展を願う市民の意気込みが感じられます。

写真１は、千葉開府八百年記念碑です。工費 2,000 円をかけて昭和４年６月１日に除幕式が行われました。式では「今ヤ千葉市ハ大都近郊ノ都邑トシテ逐年発展ヲ加ヘ戸口稠密、殷賑月ニ将ミ今日ノ繁栄ヲ見ルニ至レルモノ所以ナキニアラサルナク」（千葉県文書館収蔵「知事告示祝辞式辞綴」）との宮脇梅吉知事の祝辞が読み上

**写真１　千葉開府八百年記念碑**

亥鼻山上の千葉県殉難警察官之碑の隣に建っています



◎店頭裝飾大會趣旨

美しき街は其の都市の文化の程度を物語ると云はれてゐますが、美しく明るい店頭美がどれ程街を美化し、商店繁榮の上に生彩を與へるかは今更ら申すまでもなく近代都市美の完成へは先づ、商店街の美化と明朗とが先立たねばなりません。

來る六月一日は千葉市に取りて寔に意義ある記念日でありますので市では開府祭を擧行し祝賀をいたします。此の時に當り更らに産業振興の爲めに左記要項により店頭裝飾大會を開催し、より一層清新にして明朗なる店頭美を現出したいと存じます。就ては各商店に於かせられては、よりよき街の美化と御店繁榮の爲めに本大會に奮つて參加せられるやう切望してやみません。

昭和十一年五月　日

主催　千葉市
千葉市商工聯合會
後援　千葉市賣出會

**写真２　店頭装飾大会趣旨**

千葉市総務局所蔵千葉市歴史的公文書 10000-99-99-031「昭和 11 年度千葉開府記念関係綴」より

げられました。

昭和 10 年７月１日の『千葉毎日新聞』には、御茶ノ水駅～千葉駅間の直通電車運行、千葉警察署新庁舎落成、都川改修工事完了を祝う「躍進千葉の昂奮　早いぞ電車！モダンだ千葉署　都川には”灯”の流がれ　歓喜はたぎる三大祝賀祭」の見出しが躍りました。

東京への新ダイヤは、午前４時半から午前零時 40 分まで６分～ 18 分間隔で１日 87 往復となり、所要時間は 45 分に短縮されました。また、都川改修工事は昭和恐慌への対策である時局匡救事業（救農土木事業）として実施され、流路を拡幅・掘削してコンクリートの護岸と橋を整備し、河口を浚渫して船溜を造り、その土を利用して寒川地先海岸に埋立地を造成しました。工事の延べ労働人員は 10 万人を超え、地域経済に大きく寄与しました。

昭和 11 年には開府八百十年祭が挙行されました。６月１日に記念祭・祝賀園遊会・千葉氏歴代の慰霊祭・子供神輿渡御、２日には商工祭、３日に広告祭（仮装行列）、このほか３日連続で店頭装飾大会・商店街大売り出しが行われました。写真２は、店頭装飾大会の趣旨です。東京の松坂屋・三越などの大資本の出張所が進出して無料配達や商品券発行などを行っており、市の商工業者と顧客の奪い合いがおきていたのです。千葉市商工聯合会は店舗の照明や陳列窓、値札などの装飾を改善して顧客の要求に応えようとしました。

審査長を務めた清水正巳（商店経営雑誌『商店界』主幹）は「他の同程度の都市に較べますと可成り進歩してゐると思います。東京に接近してゐる関係上刺激されるのと加入各店がよく研究される結果であらうと思ひます」（『千葉市報』第 123 号）と評しています。

昭和 12 年２月 11 日には周辺の４町村（検見川町・都賀村・都村・蘇我町）を合併して「大千葉市」となりました。この年の６月も趣向を凝らした仮装行列など開府記念広告祭が実施されましたが、翌月には日中戦争が勃発し、昭和 14 年には「事変は長期戦に入り新東亜建設に向つて邁進せねばならぬ時期となつたので、時局柄本年は特に行事一切を中止」（『千葉毎日新聞』同年５月 27 日）となりました。６月１日の同紙上に「開府記念日に」との題で意見を寄せた市原蒼海（教育者・ジャーナリスト）は「現下国民精神総動員下にあつて一方には国民再編成が叫ばれてゐる。…今日迎へたる開府記念日に対して市民は如何になすべきか宜しく当年を回想するは勿論、八百年の歴史を偲び愛市精神を堅持すると共に延いて愛国精神を一層鞏固ならしむるべきである」と主張しています。

戦後の復興を経て、高度経済成長とともに千葉市には大規模団地が次々と造成され、昭和 40 年に 33 万人だった人口は昭和 50 年には 66 万人へと倍増しました。昭和 51 年の開府八百五十年祭は、「知ろう・愛そう・つくろう郷土千葉」とのテーマで実施されました。急増した新住民の「ふるさと」となるような「まちづくり」が求められたのです。記念事業の一環として作成された「千葉市郷土かるた」は、千葉市地域情報デジタルアーカイブ (https://adeac.jp/chiba-city/top/) で見ることができます。また、この年の夏に始まった「千葉の親子三代夏祭り」は、現在でもつづいています。

そして今、来年の千葉開府 900 年に向けて、「千葉一族からの学びを活かし、未来へ向けたひとづくり、文化づくり」を基本理念とする各種記念事業が次々と開催されています。リニューアルされる千葉市立郷土博物館を訪れて、「ふるさと」の歴史に思いをはせていただきたいと思います。

# 出張!!紙上☆古文書講座

## ～基本の「き」をおさらいしよう～

### 第３回　下から返る文字①　ある　と　ない

ちば市史編さんだより５号（2010年）、21号（2018年）と２回掲載しました「出張!! 紙上☆古文書講座」。ずいぶんと間があいてしまいましたが、第３回をお届けします。

今回のテーマは「下から返る文字①　ある　と　ない」。

江戸時代に書かれた古文書は、和製漢文とでもいうような文章の形で書かれます。学生時代に習った漢文とは若干違っていて、ある一定の文字が「返り点」（レ点など、返り点が実際に書いてあることは少ないです）で下から返って読むことがありますが、その数はそう多くありません。たとえば、助動詞などがそのように書かれることが多いです。

今回は、そんな「下から返って読むことがある」文字のなかから、対で覚えておくといいかなと思う「有」と「無」のくずし字のかたちをご紹介します。

古文書によくでる助動詞

| | | | |
|---|---|---|---|
| 被 | る・らる | 受身・尊敬 | 下から返る |
| 令 | しむ | 使役 | 下から返る |
| 也 | なり | 断定 | |
| 度 | たし | 希望 | |
| 可 | べし | 命令・自発 | 下から返る |
| 不 | ず | 禁止・否定 | 下から返る |
| 間敷（鋪） | まじく | 禁止・否定 | |
| 為 | す・さす | 尊敬・使役 | 下から返る |
| 如 | ごとし | 比況 | 下から返る |

まずは「有」

「月」はこのかたちにくずれます

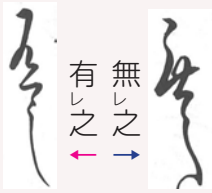
だいたいこのくらいのくずしかたが多く、斜めにはらう線と、「月」のくずしを残すイメージです。

続いて「無」

→平かなの「む」になっていきます

こちらは大きくわけて２パターンに変形していきます。横長の線と縦線数本がクロスする（しそうな）かたちは同じですが、どこに特に注目するかで最終形がまったく違ってきます。
いずれも同じくらいの頻度で書かれます。両方覚えておくとよいでしょう。

有・無はどちらも、下に「之」がきたときは
「これあり」「これなし」と下から返って読みます。




ちょっと難しいのは必ずしも100％下から返るわけではないところで、
「無是非」は「ぜひなく」と下から返って読みますが、「有間敷」「無事」は上から「あるまじく」「ぶじ」と読む…など。

ある程度の決まったパターンを覚えることと、前後の文章から判断することが必要です。
形がみえたら「もしかして下から返って読むかも？」と考えながら読むといいかもしれません。

## あとがき

ちば市史編さんだより35号をお届けします。連載中の「千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!」、本号では、松浦委員にご執筆いただきました。800年記念祭開催当時の背景にあったのは不景気。いま、我々をとりまく社会は、日々国内外問わず大きな災害、戦争、事件と、漠然とした不安感がぬぐえません。そんななか、開催される900年記念事業は、これからの千葉市に何をもたらすでしょうか。

そしてずいぶんとご無沙汰しておりました「出張!! 紙上☆古文書講座」も掲載しました。みなさまの学習の助けに、ほんの少しでもお役にたてましたら幸いです。

さて、今秋には、千葉市立郷土博物館がリニューアルオープンいたします。みなさまに千葉市域の歴史を楽しく知っていただける展示を目指しておりますので、開館の暁には、ぜひご来館ください。（え）

ちば市史編さん便り35号　Chiba-shishi News Letter No:35
発　行　日　2025年9月30日
編集・発行　千葉市立郷土博物館　市史編さん担当
〒260-0856　千葉市中央区亥鼻1-6-1
印　　刷　株式会社みつわ